突然変異

すみ鯨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
突然変異

【Ｎコード】
Ｎ５６９７Ｉ

【作者名】
すみ鯨

【あらすじ】
いつも通りの一日の始まり。
なんでもない一日になるはずだった。

突然変異~ 前編

遠くから音楽が聞こえる。

「この曲はなんだろう・・・」

僕は眼覚めた。十畳一間の部屋ではコンポが、タイマーでセットしたとおりの時間にＭＤを

再生していた。曲はスピッツの渚だった。布団の脇に置いてあるリモコンを手に取り、停止

ボタンを押す。いつもと変わらない朝だ。

カーテンを開けると、外は酷い雨だった。

カッと光る雷光に続いて、ズーンという雷鳴が聞こえる。バケツをひっくり返したような雨だ。

「ちぇっ、この天気じゃあとても自転車は無理だな」

僕は眉間に皺を寄せ、誰にともなく呟いた。雨の日は電車で通勤するため、少し早く家を

出なくてはならない。洗面台に行き、急いで顔を洗う。頭がスッキリしてきた。あとは髭を

剃って、着替えれば家を出ることができる。一人暮らしを始めてから、朝食を食べることは

ほとんどなくなっていた。胃が受け付けないとかではなく、ただ単に面倒なのである。

タオルを置いて電気シェーバーのプラグを差し込むと、スイッチを入れた。

ブーンというモーター音と共に、歯が回転を始めるはずだった。ところが右手に握られた

電気シェーバーは、うんともすんとも言わない。二度三度とスイッチを入れなおしてみるが

駄目。まったく動く気配が無い。

「くそっ、この急いでる時に」

まだ買ってから半年もたっていないから、修理は無料でやってくれるだろう。だがたとえそう

だとしても、忙しいときに限って起こるトラブルに、イライラは抑えられなかった。洗面台の

引き出しを引っ掻き回して、T字の剃刀を引っ張り出す。先月出張先のホテルから持って

帰ってきたものだった。石鹸を泡立てて顔に塗りつけ、髭を剃る。T字の剃刀なんて使うのは

久しぶりだったし、イライラしていたこともあって、顎の辺りを少

し切ってしまったが、滲む程度
で血はすぐに止まった。
ジャージからスーツに着替え、ネクタイを締める。充電スタンドに立ててある携帯電話を
取り、ポケットに入れた。ランプは充電完了を示していた。
ドーン。玄関で傘を掴んだとき、また雷鳴が轟いた。
「ひょっとして傘に落ちたりして・・・」
そう思った僕は一度部屋へと戻り、レインウェアを着て部屋を出た。ウェアのフードを被って
走り出す。駅までは歩いて十分ほどの距離なのにもかかわらず、着いたときにはすっかり
濡れ鼠になっていた。駅には同じく濡れ鼠になった人が溢れていた。
普段自転車で通勤する
僕が定期など持っているはずもなく、やや列のできている券売機へと並んだ。「幾らだったっ
け」なんて考えているうちに券売機の前まで来てしまう。財布から
硬貨を取り出し、投入して
点灯したボタンを押した。

ところが切符が出てこない。壊れているのかとボタンを連打すると、十回以上も押してやっと
切符が出てきた。朝から続く予想外の出来事に、時刻は遅刻ぎりぎりである。

会社に着くと、既に始業五分前であった。間に合ってほっと胸を撫で下ろし、パソコンの電源
を入れる。ポケットからハンカチを取り出し、ズボンについた雨粒を拭く。ぐしゃぐしゃに濡れて
しまったスーツの前では気休めにもならない。僕はズボンを乾かすのを諦め、コーヒーを買い
に行くことにした。やはり調子の悪い自動販売機で缶コーヒーを買い、席に戻った。既に
パソコンは立ち上がり、スクリーンセーバーが起動していた。早急に仕上げなくてはならない
仕事はなかったので、とりあえず頼まれていた書類の作成に取り掛かる。

仕事を始めてしばらくして気が付いたのだが、なんだか異常に画面がチラつくのだ。しかも
時間が経つにつれて、どんどん酷くなっている気がする。そして十一時を回る頃には、

あまりの酷さに仕事をしていられなくなってしまった。もはや『チラつく』を通り越して、定期的
に画面が消えてしまうのである。上司に報告すると、修理を呼んでおくから早めに昼休みを
取っていいとのことだった。
　会社を出ると既に雨は止んでいて、どんよりとした曇り空が広がっていた。期せずして長め
の昼休みをもらった僕は、突然転がり込んだ時間を持て余してしまい、結局近くのマックへと
入ってしまう。まだ昼休みに入っていない時間帯とあって、店内はややがらんとしていた。
窓際の眺めのいい席に座り、たった今カウンターで受け取ったばかりのハンバーガーに
かぶりついた。
　ファーストフードというだけあって、ものの十分で食べ終えた僕は、またしても時間を持て
余してしまった。このあたり自分の不器用な性分が嫌になるが、性格なのだから仕方が
無い。そこで僕は同僚の中田にメールを送ることにした。もしかすると少し早めに仕事を抜け

られるかもしれない。話し相手がいれば時間を潰すのもグッと楽になる。ところがポケットから

取り出した携帯電話は、バッテリー切れなのかうんともすんともいわなかった。電源ボタンを

押しても駄目。何の反応も無い。

「確かに朝は充電完了のランプが点いていたのに・・・」

今日は電化製品にツキの無い日だなあ。僕はテーブルの上に携帯を投げ出すと、ぼんやり

と外を眺めていた。

ヴーン、ヴーン・・・

驚いたことに、さっきは電源の切れていた携帯が着信した。変だなあと思いながらも、折り

たたみ式の携帯電話を開くと、やはり電源が切れてしまっている。何度か繰り返してみたが、

テーブルの上では確かに電源が入っているのに、どうも僕が触れていると電源が切れて

しまうようなのだ。

「ここ空いてる?」

携帯を前に猿のように困惑する僕に、後ろから声がかけられた。振り返ると、そこにはさっき連絡しようとしていた中田が、ハンバーガーの乗ったトレイを手に立っていた。僕の向かいに腰を下ろし、ハンバーガーを食べ始めた中田に、たった今起きたことを説明する。初めこそ笑って相手にしていなかった中田も、実際に携帯の電源が切れるところを見せるとやや表情を硬くした。

「お前、妙な電波でも出してるんじゃないのか？じゃなきゃ電気を吸い取ってるとか・・・」

「馬鹿言うなって。どっか接触が悪いんだよ」

僕はポケットに携帯を放り込み、氷が溶けて薄くなったコーラを飲んだ。常識的に考えて、人が電気を吸い取るなんてありえない。そんなのはマンガとか映画とか、ＳＦの世界だ。

「それよりさ」

突然変異~ 後編

僕は昨晩行われたサッカーの親善試合の話をした。対戦カードは日本対ブラジル。

結果は三対二で日本の勝ちであった。親善試合とはいえ格上相手の大金星に、

おそらく日本中のサッカーファンが沸いたはずだ。共に大のサッカー好きである二人

は、携帯電話の事なんか忘れて試合の話で盛り上がった。そうこうする内に昼休みも

終わりが近くなり、二人は会社へと戻った。

デスクに戻ると、パソコンのモニターに大判の付箋が貼られていた。そこには女性

らしい可愛らしい字で、

「業者の方が点検しましたが、どこにも異常は無いそうです」

とだけ書かれていた。確かにパソコンの画面は特に異常がないように見えた。

チラつきもなければ、当然電源が落ちる様子も無い。

「確かに調子が悪かったのに・・・」

ブツブツと呟きながら付箋を剥がし、クシャクシャに丸めてゴミ箱へと放り込む。

とにかく午前中に済ませるつもりだった仕事をやってしまわなければ。椅子に座り、

キーボードを引き寄せた。次の瞬間それまで煌々と灯っていたモニターが真っ暗に

なる。驚いて手を離すと、電源が入っていないことを示す赤いランプが点灯した。思い

出したようにポケットから携帯を取り出すが、こちらもやはり電源が入っていない。

トイレへと向かい、顔を洗った。鏡を見ると、青白い顔をした男がこちらを見つめて

いた。水分を手のひらで拭い、頭の中を整理する。パソコンがおかしかったのは、僕

が触っていたせいだった。恐らく携帯も、電気シェーバーも同じだ。理解しがたいが、

自分の体に異常が起きているようだ。となれば病院に行って検査してもらう他、道は

無いように思われた。上司に体調が悪いので早退させてほしいと告げ、鞄を手に

オフィスを出る。
　ボタンを押してしばらく待っていたのだが、一向にエレベーターが来ない。さっきから
エレベーターは絶えず上下を繰り返しているのに、僕の居る階は素通りしていく。不審
に思ってよく見ると、僕がいくらボタンを押してもスイッチが反応していないことが
わかった。昼休みに会社を出た時には確かにエレベーターに乗れたのだ。昼休みから
戻ったときは、健康を気遣う中田に付き合って階段だったが。電気シェーバーに始まり
券売機、自動販売機、携帯、パソコン、そしてエレベーターと、段々影響を及ぼす対象
とその影響が大きくなっている。そんなことを考えていると、不意にエレベーターの扉
が開いた。降りる人と入れ違いにエレベーターに乗り込む。一階のボタンは既に
押されていた。ビルを出て駅へと向かう。券売機に硬貨を投入し、胸ポケットから

ボールペンを一本取り出すと、それを使ってボタンを押した。本体には触らないように、慎重に切符を投入して改札を抜けた。触ってしまえば改札も止まってしまうかもしれない。ホームには丁度列車が入ってきていた。駆け込むと同時に扉が閉まり、走り出す。まだ1時過ぎということもあって車内はガラガラである。手すりを掴み、窓の近くに立った。席も空いていたが、流れる景色を眺めながら、ゆっくりと考え事をしたかった。右から左に流れる景色を眺めていると、僕はおかしなことに気がついた。

列車が減速している。

列車は見る見るうちに速度を落とし、遂には完全に停止してしまった。そこは駅でもなんでもない、線路の真ん中であった。その上こんなところで停車したというのに、車内にはなんのアナウンスもない。乗客も皆、不思議そうにきょろきょろしている。

そんな中不意にある考えが頭に浮かんできた。

もしかして、自分のせいなのではないだろうか。

僕の右手は金属製のポールをしっかりと掴んでいた。半信半疑で右手を離すと、

徐々に列車は加速し始め、通常通りの運行を開始した。そして間もなく、

「只今、原因不明の停電により列車が一時停車いたしました。停電は既に回復し、

通常通りの運行を行っています。大変ご迷惑をおかけしました」

というアナウンスが流れた。早い段階で気が付いたからよかったものの、もし放って

おけば後ろから来た列車に追突されていたかもしれない。

「やはり自分が電気を吸い取っているのだ・・・」

中田が正しかった。僕は一人で青くなった。そうこうするうちに列車は目指す駅へと

入り、僕は列車を降りて歩き出した。駅を出て、病院へと向かうのだが、あまり頭が

はっきりせず、考えがまとまらない。

運のいいことに病院は空いていた。二十分ほど待っただけで名前が呼ばれ、診察室へと通される。そこには若い医師が座っていた。女性に人気がありそうな、端正な顔立ちの医師だ。

「どうされました？」

さわやかな笑顔を浮かべてそう尋ねてきた医師に、ぽつり、ぽつりと事の次第を説明した。内容が内容だけに、言い難そうに喋る僕の話を、若い医師はやや困惑気味に聞いていた。にわかには信じがたい、という思いが表情に表れている。それはそうだ、自分だって信じがたい。

「とりあえず、診てみましょう」

そういうと聴診器を耳に入れ、僕の胸に金属の円盤のような物を押し当てた。

ぐらり。

次の瞬間、僕の見ている前で医師が椅子から崩れ落ちた。何が起

きたのかも

わからず呆然と座り続ける僕の横で、看護師が慌てて医師へと駆け寄る。脈を取り、

呼吸を確認すると、助けを呼ぶと同時に蘇生処置を施し始める。心臓マッサージを

続ける看護師を前に、僕は以前読んだ本の内容を思い出した。心臓を含む筋肉は、

電気刺激によって収縮している。つまり僕が触れると心臓も止まってしまうのだ。

どこか冷静にそう考えた僕は、ふらふらと診察室を出て、そのまま病院の出口へと

向かった。

「どこか、誰もいない山へ入ろう」

外は八月の日差しが眩しかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5697i/

突然変異

2010年10月12日01時32分発行